遞信省認可

掲載要目

懸賞文藝
殘夢

名刺で意味を通ぜる法

いらつめ

第七十三号

定價壹冊貮錢五厘

明治三十三年十一月五日發兌

教師三昧評

いらつめ文藝應募者
花の見立

ハンドコロンノ事

いらつめ第七十三號目次（明治廿三年十一月五日）

發夢（懸賞韻文及散文）
日本音樂史稿（三）…………………………………………學　繩　子
名刺を以て意を他ょ通ぜる法
應募者品評………………………………………さとのや
言文一致は昔から有る…………………………………美　妙
日本文華の岸上質軒氏………………………………六のしや
教師三昧を讀んで美妙ぬしに呈す……………………本　宮　田
新刊雜誌
　數學通信〇音樂雜誌〇小說叢書〇新東洋
言文一致の主意
言文一致と東京語
婦人演舌會の辨姫の本名住所
オリーブ油
足の冷える事
和文學獨習法
美妙齋主人の小說
「まさなくも」の義
ヘンドコロンの事
毛髮についての語法
蛇を遠ざける法

社告及び社則　いらつめ一部並製金二錢五厘郵税共金三錢、十二部金二拾九錢郵税共金三拾五錢、二十四部金五拾七錢郵税共金六拾九錢、三十六部金八拾四錢郵税共金壹圓〇二錢、四十八部金壹圓郵税共金壹圓二拾四錢〇別製一部金三錢五厘郵税共金四錢、二十部金六拾五錢郵税共金七拾五錢、五十部金壹圓六拾五錢郵税共金壹圓九拾錢〇並別兩製共前金領收の上で無くてハ差上げぬ事〇府内に限り無郵税〇毎月二回（五日及二十日）發兌〇金子御差し送りの手續きハ郵便小爲替なれば拂渡郵便局と ある處に　神田郵便局と記し受取人欄内に（神田平永町九番地成美社）と御記入の事〇郵券代用に郵便爲替の無い處に限り五厘切手で一割増しなれば妨げ無い事〇見本は五厘切手で並製五錢別製七錢領收の上差し上ます〇廣告料一行金八錢、割引無し

從第六十八號至第七十七號十部版權所有

明治廿三年十一月四日印刷　明治廿三年十一月五日出版

發行人　東京市神田區平永町九番地居住　山田武太郎

印刷人　東京市本郷區駒込西片町十番地居住　山本鑑之進

發行所　東京市神田區神田平永町九番地　成美社

〇懸賞文藝新題

〇第卅二回題（何でもよし）
　右　新婚旅行の人に贈る…………………十一月十日〆切

〇第卅三回題（唱歌文章ょ限る）
　右　小春日和…………………………十一月廿日〆切

〇第卅四回題（何でもよし）
　右　馬陰れ獼猴……………………………十二月十日〆切

〇第卅五回題（何でもよし）
　右　春衣裁縫…………………………十二月廿日〆切

〇第卅六回題（何でもよし）
　右　人に半襟を送る……………………一月十日〆切

〇第卅七回題（唱歌文章に限る）
　右　無言の愛情…………………………一月廿日〆切

〇第卅八回題（何でもよし）
　右　嬉しいもの何でも二つ………………二月十日〆切

賞品も菊水摸様の金又は銀杯

右賞品は一等賞の者、二等三度の者、三等五度れ者、四等十八度れ者及び是に同じ資格に相當する者に限り進呈します。〇賞の重なつて數み充ちた人は其賞を受たか題と詳細に志るして賞品を御請求なさい。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

第三十回懸賞文藝應募得點

題　殘夢

○唱歌

（イ）

時雨と共に散る木の葉
聲も哀れに聞ゆあり。
寐屋の中までさし覗く
さらでもつらき秋の夜は

香廼舍（ナヒヨ）

尾上につまを呼ぶ鹿の
風に妻戸をひらかせて、
月の光ぞさやかなる。
さみし寐ざめといかにせん。

（ロ）

うき世をよそしさくら花
いでゆく方にさきだちて
あふさきるさと曲りゆく
いとゞ静けき春の日に
芝生はなれてたつ雲雀
羽風もゆるき心地して
かあるてあたに咲く花の
夢はやぶれていつしのに
小春の空の朝日うげ
犬のみ殘る夢のあと。
稲づれ近き草むちれ

本吉そは（カピウ）

尋ねんものと柴の戸を
嬉しげにふる犬の尾を
野路のけしきの面白く
もゆる若草見かへり、
栞の葉の上に飛ぶ蝶の
長閑にかすむ山の端は
しらむを見ればあなとしや
心も見れに歸り花
させる軒端の下に伏す
もろき露にや宿るらん

ゆふべさびしくあくむしの
空より出る月がけて
いつか夢路にかよふらん。
ねむるともなくさむるとも
洩れくる方の閨の戸を
さしむかひたるあり明の

ねもうききまゝにふけわたる
あがのめもゆかて現より
起つ伏しつゝ夜もすがら
よらぬ身にしむ秋風の
あくるも遅き朝日がけ
月こそ夢の名殘りあれ。

評　後の歌の方が前よりよく出來てゐます。

（ハ）

横山ひろ（カピウ）

所はいづこ見うねぜも
昔しの友ともくりなく
秋の最中れ月かげを
くまも殘さずかたらひて
更るもしらで樂しめり。
曉かねにおどろきて
閨の灯火かすゝにて
夜ははの〴〵と明りにけり。

共に學びしふるさとの
おなじむしろに團居して
打もあがめん眞心の
かたきにえらき長き夜の
折からひゞくいあのめの
寐ざめて見れば獨りねの
まは〴〵つぐる鳥の音れ

（ニ）

小富士（イロ）

心なき身も秋の夜の
雨さそひくる小夜あらし
夫かあらぬか遠きぬた
友におくれし一つ雁
そのへの鹿の音もたえて

あされおぼゆる寐覺ゝない
ぬをまをもれていとさむし。
たれとまつらん深き夜に
聲かあしげにきこゆなり。
枕におつる糸水の

いと〻さびしさ添へにけり。

ねさめの床れ徒然を
砧の音のきこゆなり。
ねやの戸ちかき虫れ聲
きたらん年はこよかしと

なぐさめよとて遠近の
峯よ妻とふ鹿のこゑ
たのしたひなの住ひゝな。
都の友ぁつげやらん。

氷野 秀（オホサカ）

（ホ）

あづまの都むつれとて
よはの月かげなそれげ

ゆくもかへるも只ひとり
そぎし夢路をてらしけり。

桜 さち子（トウケイ）

（へ）

人間わづか五十年
六十一になりにけり。
殘るそいくらいくばくか、
さめてうつゝも夢こゝち
さとり行く身の末の夢
いかなる夢や殘るらん。

評　意匠が稍高いです。
以上六曲第四等賞

その年月もはや立て
今日より後のゆめのかぜ
我は知らねど神ぞしる。
世のさいはひそいのりつゝ
いかなる夢や殘るらん。

楼 乃（イハシロ）

（ト）

なたはしたふる里の山
咲きそめし園生の菊
夢なりた學びのまどの

あづかしき父母のかげ
育てゝしかないの犬
い、、、、、、、
影白しなりわけの月

（チ）

花の都に上り來て
空なつかしくひとりねの
見しやそれともわかぬ間に
本意ありりしと只管に

奥野 やす（オホサカ）

はや五年を故郷の
かべよ畫ける俤を
渡る浮橋中絶えて
夢の名殘ぞ惜しまるゝ。

（リ）

小萩がもとの小牡鹿も
妻よびかはすこのごろを
妾を捨てゝ妾とそて丶
とばかりすがる人のそで
夫のあとを「おゝさあり」
足踏みはづす物音に
ゆめとさむれぞ氣がゝりな
無常を見せて秋のそら
いま曉の雨もよひ。
以上三曲第三等賞

菊野 花子（イバラキ）

野邊のすゝきの穗にいでし
「あら情なの我夫や
えゝ情なの我夫や」
すげなく拂ひ立出る
立上るえんのそし
うれしや夢か
下女が開ける窓の戸に
さえし夕べのおもかげれ

（ヌ）

渡りそめさるかりがねの
雨ふるさとのことづてを
い、よ、、い、、、、、い、、、、、
長き夜の夢よりも猶儚なきは
落殘る木の葉に潛む蝶はさぞ

撫箏 女史（ミノ）

聲ぁゆめさへさめ〲と
まてどもわけぬ秋の夜半
、、、、、、、、、、、
こひしく思ぬむのしなり。
名殘りをしげよゆめむらん。

今正に浮世の夢のさめぬべき　わが身も蝶に似たるかな。
雨ふる軒をそらぬ落葉―　庭の木のまに叫ぶあらし―
むすべる夢もさえはてぬれど　あはれなくあり雁の一つら。
凡てうつる世は夢なりと　思ひまはせば我身こそ
わかつる近き月ならめ　残んの夢路たどりつる。

右第二等賞

（ル）　紅山樵夫（ミヘ）

浮世に漂ふ浮草の　我にしあれば夢にさへ
浮世をあれぬくるしさよ。
頼みなきてふ此世とば　夢にたのみし我身こそ
醒めて悲しき夏のくれ。

（ヲ）　瑞香女史（トワケイ）

つめたきぬすま身をそしむ　かすかにのこる雁の一聲
ふるさとおもひし。

（ワ）　三坂絹（サカヒロ）

宿りし月も人共に　今は行方もしらぬ火の
消えぬ思ひのあるわたし　涙は海のうき寝ゆゑ
袖のひる間は無いわいな。

言葉はそうた調であるための審査以外ではありませんで唯趣向が乏しくありました。

以上三曲審査以外

〇文章

（イ）　名城しげる（イヘシロ）

これしげる、子故の闇とは昔しも今も同じこと、妾は早六十に餘る老体、汝は當年取て十八、身の成行を定むる節。地獄の沙汰も金とやら、金だに十分あるなればこれより斯と思案の仕様もあらうなれ。打ッて變つての身は零落、朝夕の烟だに立てかねて他人に奉侍する已に三年、衣服調度もそれ〳〵に心配あるべき盛りの年、空に過すのみあらず日々贈り越さるゝ飯代に露の命はつなげどもつれなきあらしの吹くあらば一ト夜を待たぬ老櫻散りて果敢なき身なるぞよ。死する命は惜しまねどまだ年端も行かぬ汝等の行末見ぬが冥途のさはり、此後は何なり一の手業と勵み稚き弟と力を合せ家名相續して下され。　これが此世の……

あらお母さん又そんな悲しいことをお言ひなさる。長の年月海山の大恩受けし母上さまは物見遊山に是までは骨折を慰め、甘きお箸を進せるは吾々の本分なれ。其本分をまんざら忘れたるにはあらねども何を云ふにも稚弱き体、御恩かへしはまだなことと反つて御心配を被ふる仕義。之れを思へば私しとて安き心もありません。左は去りながら母上さま、移り變るも世の習ひ、沈む淵あれば浮む瀬はあるもの、吾等

とても其通り花咲く春もありましやう。どうぞ此上のお願ひは外にハない常々の御養生を大切にして一年なりと長らへて姉弟の行末をお見届け願ひます。

あらお母さんもうお歸り……あ…あゝお母さん。お母さん……吾が叫ぶ聲に驚きてはッと目を開けバあれおん枕上の一夢。殘燈明又滅。あゝ今のは正しく母上の俤、あの靑褪めるお顏、瘠せ衰へしお手、此の世の人とも思はれぬ……もし御不例……あゝ夢は忘想……もう夜が明けた。戸と明くれバ鶏鳴三つ四つ五つ。

(ロ)　芮園居士(ジフゴ)

「塚原さん」

「はい。誰かと思へバ天野さんですか。近頃は大きに御無沙汰いたして……」

「いゝえ却ッて私の方が……それはさうとあなた御卒業ハ何時ですの?」

「來年の四月です……あなたは?」

「私ですの。私ハ來年の七月です。」

「それからは大學にでも……」

「どうなるか分りませんが多分……」

「私だけはもう卒業さへすれバそれから習ッた所を活用しますから女にハ是れで澤山と思ひます。それにもうと……と……年も…でもから……併しあなたはどど…どうにも」

「お孃さまお目覺なさいませ。お孃さま〳〵」

「おや清か……起きやう……嗚呼今のは夢であッたら。どうしてあのやうな夢と見たゝらう? あゝ天野さんの思ひが殘ッてをるのか。なにしろあの續きを見たかッた……どれ寫眞がある筈……嗚呼この顏! 今は何處……嗚呼何處……去年の今頃も御丈夫で大學……あまり御勉強なさッたのが本……高等中學迄でおよしなされバ……嗚呼此樣な事はなかッたらうに……此時も思つたが……人にまけたくない御性質、たとへ許嫁とていへ後にも偕老の契を結ぶ中! それに「是迄でおよしなさい」と止めなかつたのが妾の不貞! 妾の罪! だからこんな夢を見たであらう。あゝ思へバ實に浮世!

(二)　仝上

「おい天野君起きないか。もう四時半だぜ……」

「そゝ君起きるか……僕も起きやう……」

「根本君はまだ夜中だね——ねバうの優等生だから。」

「おい吉田君君は昨夜根本君の寢言を聞かなかッたか?」

「あゝ〳〵聞いた。可笑しくッて獨り笑ッたよ。」

「おい〳〵君々、そッと〳〵……あのね奴と一つ欺してくれないか。」

「よからう〳〵……してとういふふうにする? うん〳〵よし〳〵…甘い〳〵、君がいゝ加減に拵へたまへ。」

「よし僕が書くから!」

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

「起してやるか？」

「よし出來た。」

「れい〳〵根本君何だもう十時だぜ、起きて賜へ……おい〳〵」

「うゝ……いや是は失敗ッた。」

「根本君今朝君の處へ手紙が來たぜ。」

「どれ何處からだ……あゝ是か？」

「おい根本君何處からだ。　名前を匿してあるな。　見せてもよからう—怪しいな。」

「いや見せられない——少し秘密だから。」

「だッて君は政治家でもあるまい。」

「だッて……」

「おい吉田君は、、」

「なんだ君等は僕を欺したな。　失敬な……」

「は、、、」

（ロ）

伊勢太夫（イセ）

われ浮世厭になり、そッでに首縊らんとせしが、思へば親あり兄弟ある身のそれもならず、遽に發心して寺町西來寺に駈け込み、和尚の手に黒髮ぞてと剃りて貰ひ、今は黒染の法衣に身を固め、朝夕佛に花を捧げ、閼伽を手向け、香と拈り、讀經の外更に餘念もなし。　精進々々、まゝ鳩が鳴く。

・　・　・　・　・　・　・

ヤア今日のこの新聞の廣告は何だ。　伊勢太夫エライことを企てをつたな。

・　・　・　・　・　・　・

うゝん（欠伸する聲）、あゝ東が大分あかるくなッた（中ば口の中）、どれもう起きやうか（獨語）、あッお母さんの夙いこと！　はア、今のは夢だッたか。

（ホ）

撫箏女史（ミノ）

世にさみしう哀れなるはさはあんなれどなが〳〵しき秋の夜半なすぎてしかたの戀しきもめさめてたゞひとりわびしきねやにて枕そばたつる折にまさることはあらめやは。　かたぶく月も山のはにやすらひけん、力なき光さへいと青げに、枕ちかくおとつるゝかりの初音きゝて、籠にかへる虫の聲のかれはてゝいまはうあはれをましぬ。　あはれ〳〵さと人も今はゝや寐まりぬ、衣うつ音さへしぞなの〳〵にさえしうてそれもはもれ。

衣うつ音そ哀れと思ひしに絶えもればいとゞ淋しかりけり

賤のをぶまきくりかへし、いとさみしうなはれ〳〵と幾たびか打ちかこつもせんなし。　さるもいねんにもよしなく、なけがたもなは遠かりとやがてふんでかいとりうくなんかいしるしぬ。

（ヘ）

竹下山人（シフ）

今日は禍も後の日に來る幸の兆……それとゐふてそれも災は根となるれも。　世は塞翁が馬に似て實に夢の中は夢で

す。幾万年と限りない長い此の世にかぎりある人の命の長くて五十短くば草葉に宿る白露のはかなく消ゆるも多いです。そも因でしやうか、果でしやうか。まことや淺ましい假寐の夢にも劣るとは誰がいひ初めましたらう？此世を……喜びせなくば悲しみもせまいものにと今さらかへらないうらみ泣、しかし骨肉の間柄です。父の冥府に行き玉ひし歎きの中に行き違ふてわれの丁度十五の春、初めて浮世の風に逢ッた一人の弟といふは父のかたみと吾も人も悲しい中にも悦しくて笑へば這ふか這へば……とてその人柄さへ頼母しく親兄弟にも見えました。指を屈めて三つ四つ日に月育つを待つたのは今年で五年。過る年から己れも家を去りました、けれど親に代へての一人の弟、何となくいとしくなつかしく牡鹿の角の束の間でも父と思へば引きつぎて我同胞はどうならう、我の弟は煩はぬかと思はぬ時はなかつたです。それに去る月二日の夜は心に掛かることもなく眠ッたのは何故ぞ蟲も知らないのでしやう。いつにもなく人のいふ吉夢—惡夢と後にもくるしい夢に心も常より爽に早朝枕とかき除けて起き上り、机の上をふと見れば急報てふ手紙のはしなく目に止りました。いつの程に來たのかと披けば吉夢の眞のうら、早や落ちかゝる涙の玉、夢かと目を見張れど曇ッた目にはなか〱に文字もよく見えない。涕にぬれて脆い紙、手の戰くに所々破れ、讀むさへかたくなりました。それに心もいよ〱亂れ、かひない事と氣もつかず、罪ない疊と践み占めても千々に碎くる五臟六腑、偏癒えやう筈も無く、神の佛もこれなれど嘆きを他に見過すとは世に功のないものぞと果てはうらみの門違ひ、只呆然と突立ちました。ああこれが同胞の暗途に旅立ッたしらせ、これが弟の逝ッた朝でした。

以上六章無賞

（ト）　小富士（イロ）

でなくともさびしくかなしくかんじるのは秋の夜！ましてふるさとを遠くはなれた旅亭に只ひとりかげ暗き孤燈を友としてねざめをわぶる旅客の心は？耳やかましく鳴き立てゐた虫の音も更行くまゝによわり行き、かすかに聞ゆる砧の音ー雲間を渡る雁の聲轉た腸をたつやうです。雨かと耳をかたむくれば汀の萩の上葉を渡る風！

折から時刻を報ずる時計チーン〱、ああまだ二時か、長夜だ。眠られないにつけ浮びくるは……故郷の事、老母はさぞお淋しいだらう、妻子は何して——考へるほど益々氣がすんで……静かに起き直つて消えかゝッた行燈の火を掻立て旅日記に書き記したはまん夜の……

（チ）　香圃女史（イガ）

閨の戸をうつ木枯の音に驚かされて眼を開ければこれはこれ一場の夢、枕元の薄暗い洋燈のみ冷やかに燃えて、たゞ〱聞えるは梁を走ける鼠の聲と柱時計のきしる音ばかり。

私は邊りの淋しさに夢の中で見た人の事　思ひ出して過ぎ去ッた事を考へては徐ろに哀を催し、思はぬ夜着の襟をぬらしました。　そもそも今夢に見る人と云ふは私の親しい友ー今年の殘春散る花と共にあはれ蕾の身で此世を去ッた人でした。　常にしたはしく思ッて居た其の亡た人をはからぞも親しく語は合ッた嬉しさ。　私は本當に君が生き返へッたとばかり思ひ、之れからは彼れや是れやを一所に學びましやう等と今迄の通りに仲よく話しをして居たに、あゝ果敢ない一つの夢で有ッたとは。　恨めしい君は矢張り彼の世！　悲しさはどれほどでしやう？

あゝ思ひ出す君が存生の時は互に裁縫の競爭をしたり、或は讀書の復習をした事も度々、夏の夕暮には團扇片手に共に手を携へて睦しく公園を散歩し又冬の夜永には面白い話とのたッたり聞いたりした事も有ッたに。　君の未來の芳名も只一片の碑に刻まれやうとは。　嗚呼思へは夢の世！　君が白玉の肌に新柳の髪の亂れ掛ッた麗はしい姿もー君が涼しい目も終に長く閉ぢられて、君が愛情を呼吸した燃え立つ蕾の唇に微笑を含んだ其笑顔、あゝ其の花の顔もー皆諸共に冷たい土に化せられたとは。

思へは懷舊の涙衣の袖にそゝいだ時、夜明けと告げる遠寺の鐘、ボーンボーン。　一層君の事思ひ出されて知らず後はたゞ口の裡、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

十八居士(トシ)

記(り)憶の力強きにならねど余が目をさませしときは常に夢中に見たることと記憶せざるなし。　或るは美しき女と馴を親しみ、あるは暴き男の虐げに遇ひ、あるは愛らしき己がまな子を教訓し、あるは年ぬけたる翁媼と交り遊び、あるは國家の爲めに兵仗を執り、砲聲高き其中をくゞりくゞりて敵兵と花々しき戰をなし、或るは公衆のためゝ演壇に立ち上がり、拍手喝采の中に滔々懸河の辯を揮ふて政治の得失を議し、あるは乞丐となりて僅かなる飮食を乞ひ、あるは富豪となりて多くの米錢を施すなど思ひの外なることをも見もし、聞もし、言ひもし、行ひもす。　さては夢は不思議なるものかな。　吾が記憶の力は常の事にありては人並みなるに夢中のことと眠りのさめしときにしかじかと覺ゆるに亦不思議なれ。

芮園居士(フシマ)

人(ぬ)の往來は戞々音はまだ聞えないが稀れに通るも能かなると見えて、門守る犬の吠える聲折々聞え、東天は漸く白み、料理屋や呉服屋の瓦斯燈は夜通しの香にねむりを催ふし、四隣さびひげなるは即ち市街の曉景です。　下女は竈に火を焚きつけてれいて水を汲み、猫を相手に烟草を飮み、菜蔬を切りて鍋を掛け臺所の掃除等怡はしきは下宿屋の有樣です。二階には女學生が四五人居ッたと見えて笑ふ聲かまびしゝ。

「れや驚きましたよ。　どうしたんでそ？」

と花園の中より問ひかけしは年は二八かよくうらぬといふ可憐的でした。　問へども答ふるものもなく、只ナヤッ〳〵と笑ふばかり、

「長尾さんよはよわった……」

「あら妾がどうしたんでせう？」

「どうしたッてあなた……夢でも見たんでしやう。　え、長尾さん……」

「はゝ長尾さん……松や違ひました○○さん……ですね……分りました。　はゝゝ」

初より若しやかれ夢で寝言でもいひやしまいかと胸がどき〳〵してとる處へ此の單刀直入……顔は秋になッたり、夏になッたりしてさもはづかしげに見えました。　併し年が年ですもの。

（ル）　伊勢　太夫（イセ）

やア君か、恕したまへ。　僕も七日目の骨休めだから、とッと寝過した。　まゝ片付るから爰へ来たまへ。　君僕は今朝面白い夢を見た、話さうか。　なんでも故郷の公園で、噺、君等は山の上から僕等は下から粘土の凝塊を投合をした。　ところが僕等の方が陣場が悪いもので負けさうになッて来た。　そこで僕とあの君も知ッてゐる角之助と二人で不意ふ君等の背後に出で、敵の陣を取ッてやらうと相談して、裏道の険しい所から藤蔓や根節よすがッて登りかけた。　が、それはよかッた。　するとも少し中程と思ふところ上の方から黒い動くものが近寄ッた、ものだから先に立ッた角之助は熊ぢやと大聲あげて此方を向いた。　僕もその拍子に冷ッとして前後知らず譯なしに命々と宅へ逃げ込んだ。　時が夕飯で、お、こはかッたと角之助と並んで喰べかけると目が醒めた、のは君に起こされたのだ　。

評　一氣呵成

以上五章第四等賞

（ヲ）　橘　さち子（トウケイ）

七十あまりの老人向島の百花園へ秋の七草見に行くとて三吉といふ小僧共よつれ朝早く出て、

老「今朝は時とまちがへたと見え、余り早過ぎて手前はねむくらう。　むかし淺草の富士が見えるよ——此目がしよぼ〳〵するからそれで今時分をまのふ光といふのぢや。」

小「へいさうで御座いますが。　お三が今朝は光ッぱう早くおきてまたくしをおこしましたからわたくしは「たか」と「あすび」の夢を見のこして參りました。」

評　敏捷な作ですがちと輕過ぎました。

（ワ）　仝　上

夢のうき世のたとへの如く〳〵り返したる日毎のつとめ、まけて母たる人のいとけない子をそだつる事こそ肝要なれ。若き御新造我子と見えてあいらしき稚兒に糸、犬、錨とをし

へゐしうちに稚兒はよく覺えて糸犬いかり又あいうえおとくりかへしゐしが横になり、
子「おッかさん坊はお手本そらでよむから御褒美下さいよ。お母さん」。
母「上げるとも、よく覺えるからなんでも上げるよ。 おやねんねかえ」。
風引かせじとかいまき出してそッとかけれバもねおきて、
子「ぼうはねんねしないよ。 今の御菓子をこへいったようお母さん。」
母「お菓子なんぞありやしないよ。おまへ夢見たんだらう」。
子「うゝんもめは知らね、お菓子さお母さん、ようお母さん」
母「それが殘夢といふのだよ。 は、、」。

秋（カ）

奥野やす（オホ ナカ）

「秋子さん、秋子さん。」
聲高に枕邊で呼びさましてゐるのも一人の少女、起こされて秋子は
「おや菊子さん。 大層お早うございますねェ。」
「なに貴女早いことはありやしませんですよ。 もう九時併し昨晩も……」
「大きな失禮。」
「なんとも言へませんですね望月も。」
「左樣です。 餘りいゝ景色だッたものですからつひ夜を更かして思はぬ朝寢しました。併し日曜ですから。が、菊子さん貴女は此地へお越しなそッてから何年になります？」
「は、、唐突になんですか？」
「昨晩夢を見たのです。」
「夢？ どんな？」
「たわいもない故郷の」
「お婿さんの？」
「あら厭ですよ。 お戯けなすッては……」
「は、、御氣に障りましたらお許しを……でせんな？」
「外でもないのです、昨夜の月見にふと心に感じたことを」
「月影もおなじ光のなぜゑお詠みなそッたの？」
「そんな風流たことでは……が、今のおなじ光の—と云ふ所も妾の心を穿ッてゐます。」
「は、、此れなら隨分賣卜もやれますね。」
「は、、が菊子さん妾が此地へ參りましてから恰度昨日で五年になるのですが其五年の昔昨晩の月を故郷で父母と共に眺めたことと思ひ出して漫に懷かしうなりまして。」
「其夢を御覽なすッたの？」
「其れを夢に見たのではないのですが、餘りなつかしう思ッた故か故郷へ歸つてそいがいの隙から内の樣子を窺ふて、此れから嚴しい父母の顏を見やうとする佳境に入りかけた所へ貴女が」

「おやそれでは氣の毒で……」

「菊子さん妾はなんだか俄に歸りたくなりましたよ。」

「御尤です。久しく御歸りになりませんから。が、秋子さん歸ると言ッても今はなか〳〵……おッつけ試驗がありますから。」

「迚も歸らなければ妾は夢でも構はぬ。昨夜の續きを見たうござります。」

「は、、」

(四)

氷野秀(オホサカ)

西山月落ちて窓吹く風のいと靜かに寝顔守れる燈の影も幽かに消えなんばかりあり。夢路を辿る折りからに東天紅と鳴く鶏の音に驚かされてはゝと手足を伸したまゝ未だうつ〳〵とさめやらぬ眼をそりながらあゝ夢……夢であッたー枕を欹て不審さうにはと見まはし、矢ッ張り夢にちがひない大坂であるから……

「お廉さん! あなたどんな夢を御覽なすったの?」

「嬉しい夢でしたーその夢はねェ東京の兄さんが妾に上京せよ。英和學校へやるからといつて手紙を寄してくれましたのです。上京しましたらお國さんがお嫁になッて、おは、、赤子と抱き、そましてんで……」

「おは、、い、夢ですねェ。」

「妾は一心不亂で勉強して卒業しました。しかも筆頭で賞品まで戴いて……間もなく兄さんは岡山の裁判所へ轉任しましたから連れたつて歸省しましたのはちやうど阿母さんの六十一の祝ひ年であッたのです。」

「おや都合のいゝ事。」

「万歳樂の鶴の間で賀筵と開き諸氏さまのお祝詞と戴いて嬉しいと思ッたところで鶏の聲に……」

「隨分長い夢ですねェ。妾もみたいわ、そんな夢を……」

下宿の下女が一封の郵書をもち來りて、

「徳田さんあてゝござります……」

「いや東京からです」。

「おやお廉さん夢が豫言者でありましたねェ。」

以上四章第三等賞

(タ)

一一女史(トイワ)

ブナンコノチニヘウチヤクセリミヤウニチイウセンニテジヤウキヤウス

あゝ夢ではないか。無難! 無難! 無難! 難有や、是でこそ日頃御經讀誦の効空しからざりけれ。さなり〳〵念彼觀音力、波浪不能沒。さると勿体なや昨日までも今日までも愚痴のあまりに御佛までお恨みまうせし事。無難! 漂着! 皈京! 嬉しや〳〵あの船が難破せしとき外の人は兎にも角にも武雄様丈は何にか無難に居玉ふやも知れずと思ひ

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

ひゐたるよ實に我推量ハ違はざりけり。　我推量は違ハざりけり。　飯京！　飯京なし玉ひなバ彙ねて約束通り……ふゝはづかしや。　いッそ能め……ふは、、
　憎や座中の人が何故よ我方をのみ眺むるぞ。　人のそづかしさをも察せずに……何のめづらしき事かある。　腹立たし燭火までが手柄でもあるきよ照り輝く。　せめてこの綿帽子今一きハ深かりせば、厚からバ……
　さま〳〵と行末の事共胸の中よゑがきつゝゐるまひよ座中ハ漸々さゞめけり。　鹿爪らしき言葉づかひも消え行きつ、切れ〳〵み聞ゆるハ吾武雄様の勇ましき聲、此綿帽子今少し淺かれかし。　かの烱々たる眼ざし逞ましき骨柄、何の禍の何の淚の得侵すべき。
　不思議！　漸々と色變る吾夫、恐ろしや今ハ死人の如し。漸々と我方よにじりより、そは！　飛びかゝりざまきやッと一聲。
あはれや身ハ秋閨の中にあり。　孤燈影暗うして、枕頭雁聲斷續。

評　文勢宛がら激流。

右第二等賞

日本音樂史　（三）

準　縄　子

久　米　舞

久米舞或ハ久米歌と云ふ大來目部より起る。　則ち神武東征して大和に至る、而るよ東夷八十梟師等梟悍よして征そる能ハず帝大に憂ひ道臣命に命し諸將の饗應す。　此の時大來目部命く恐れ樂官と帝と並よ暗号れ歌を作り、此歌と相圖に征伐せられあらんしなり。　又神武紀辛酉の年春正月庚申朔大伴氏の遠祖道臣命師二大來目部一奉二承密策一能以二諷歌倒語一掃二蕩妖氣一と有り。
　此の歌のみ存して今猶雅樂よあり。　此の舞も世々の大嘗會に用ゐられしに一百四代後土御門帝文正元年十二月まてハ此等の古風も傳ハりしよ其よりしてハ此の大祀も行ハれざれハ自ら亡ひぬと見えたり。　然るに文政元年冬大嘗會行ハれけるとき古譜によりて亡ひたるを御再興ありしと承る。文正に亡ひて文政に興る奇と云ふべし。　其の舞法ハ琴取ふ人舞者八人大伴彈レ琴佐伯執レ刀作下斬二蜘蛛一狀上凡そ大嘗會よ此處に供奉も云々　又た佛事などにも此舞ありし由續紀三代實錄等に見ゆ、北山抄江家次第などに以レ琴爲レ節拔劍舞無歌とありと大日本史よ見えたり。　此ハ曲節の事を言ふか近世此の舞絕て傳ハらず。

吉　志　舞

吉志舞又た吉志部樂とも云ゐ。　續日本紀天平六年六月辛未行二幸難波宮一攝津職奏二吉志部樂一云々。　又た三代實錄貞

觀元年一月十六日丁卯大嘗會十九日庚午撤去悠紀主基兩帳天皇御豊樂殿廣廂宴百官多治見氏泰田舞大伴佐伯兩氏捺舞安倍氏舞古志　云々。　又た元慶元年十一月廿三日巳卯大嘗會廿五日壬午天皇御豊樂殿廣廂（以下前云々。文ホ仝）　此の舞ハ仲哀帝崩し皇后三韓新羅を征伐し事濟で歸朝そ。　此日將に大嘗會に當る。　此の時安倍氏ハ從者たり軍功ありし新に樂を作りて自舞す則ち此の吉志舞あり。　故に又た大嘗會舞とも云ふ（三代實錄）世々ハ大嘗會に必す用ゐらる。

國栖歌

應神帝紀十九年冬十月戊戌朔幸吉野宮時國樔人來朝因以醴酒獻天皇（一本ニ鱗魚の乾物とあり）而歌之曰加志能布邏、余久隔袁都久理余久須邇加美斯意富美岐（美斯書紀作綿廬）宇麻良爾岐許志母知袁勢麻呂賀知（古事記）　歌ひ既に訖つて則ち口を打ち以て仰で笑ふ。　是ハ蓋し上古ハ遺制なる。　然れ共此の歌調今傳らず。　又る此の人種ハ古より有りしと見え神武紀戊午に天皇欲省吉野之地　云々　此則吉野國樔部始祖也あど見えたりまた貞觀制國栖笛工（接するに氏ハ製造人にハ非そして吹奏者あらん）各十二人（貞觀儀式）また延喜太政官式大嘗祭吉野國栖奏古風また宮內式ヱ凡諸節會吉野國栖獻御贄奏歌曲每節以十七人爲定（貞觀のころよりハ五人增員せられしなり）また民部式に吉野國栖永勿課役者不忘其舊功也。また政事要略に豊明節會吉野國栖於承明門外奏歌曲雖御實。又姓氏錄に允恭天皇の御世乙未年中七節進御贄仕奉神態至今不絕後世年始有下号國栖奏而歌吹者此遺則也とありて隨分盛大なる者ありしが建武頃ヨ至りてハ僅に元日の節會にのミ供そと云ふ（建武年中行事）

殊舞

此舞ハ顯宗帝弘計王朝廷の難を避け播磨の國の大家ヨ潛居し玉ひしに一日此家に於て新室ハ宴（今の新宅開き）と稱して酒宴を開き衆人を饗應せり。　此時小楯なる者絃と撫して慰め奉りしふ天皇遂に殊舞を作ると云ふと書紀に見ゆたり。　註に殊舞古語之立出舞と云ふ。　舞狀ハ乍起乍居而舞之とミゑたり

楯節舞

此ハ持統帝の大殯（殯とハ崩せられて仮に埋ひをいふ）に用ひし舞なり。　土師宿禰文忌寸等所掌（令義解）　舞者手楯爲節度故名（大日本史）　舞者土師氏五人文氏五人皆被甲執刀楯（令義解）と有り。　一書に此舞を以て吉志舞と仝し樣に記せる者あれ共其ハ非なり。

田舞

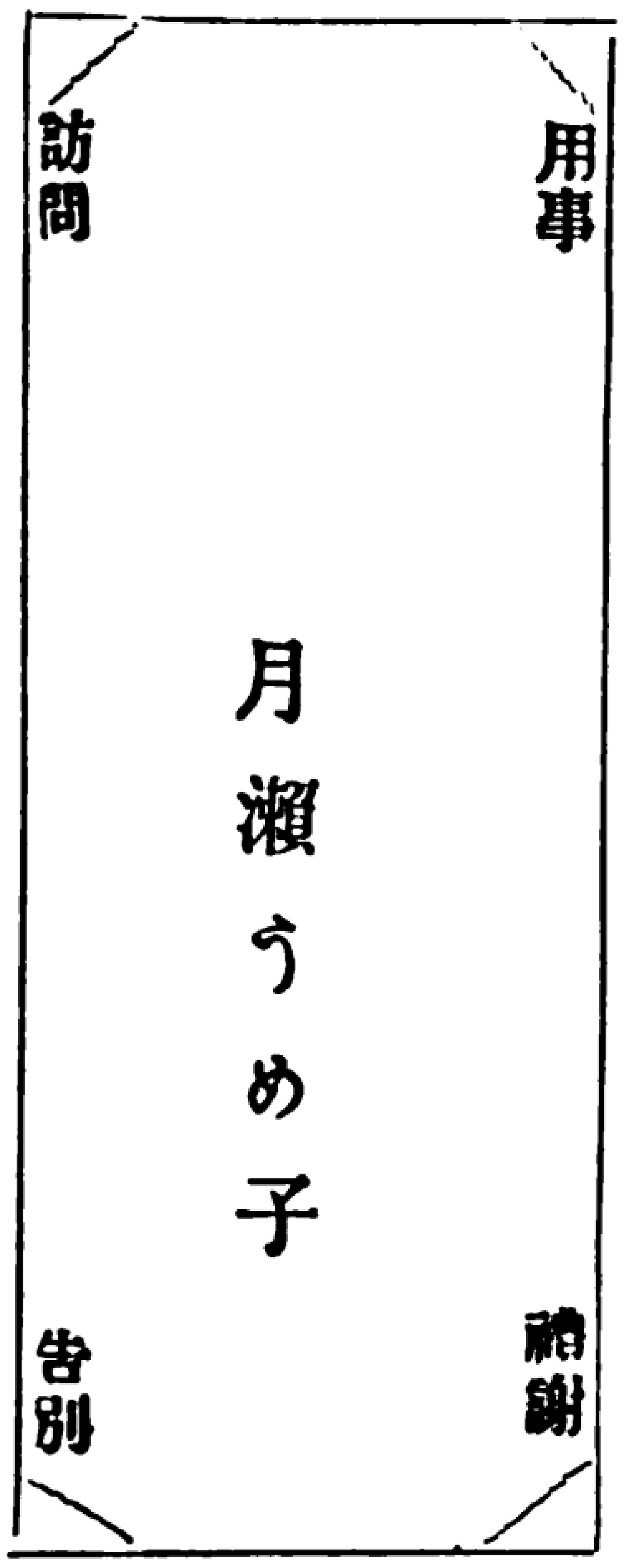
職員令集解ホ田舞師四人と有り。　此ハ多治見氏の掌とる所なり。　天智天皇紀十年五月丁酉辛丑天皇御西小安殿皇太子群臣侍宴於是再奏田舞又た續日本紀靈龜八年五月丁己云々五位巳上進裝馬及走馬作田舞於舞臺蕃客亦奏本國之樂云々。　仝紀天平十四年丁未朔壬戌天皇御大安殿宴群臣酒酣奏五節田舞云々。　又た類聚國史文德天皇仁壽

三年閏三月丙午朔鸞輿幸ニ太政太臣東京染殿第一云々。御ニ東門ニ覧ニ耕田ニ農夫田婦雜樂皆作云々。又三代實錄貞觀元年十一月十六日丁卯大嘗祭十九日庚午撤ニ去悠紀主基二所帳ニ天皇御ニ豐樂殿廣廂ニ宴ニ百官ニ多治貝氏奏ニ田舞ニなど見え、又た延喜式大嘗祭に田舞あり、田殖の舞ありと。近くは天明七年十二月廿七日大嘗會行はせて廿九日癸巳天皇出ニ御主基慰ニの時絶たると繼ぎて此田舞を奏せられたりとぞ。

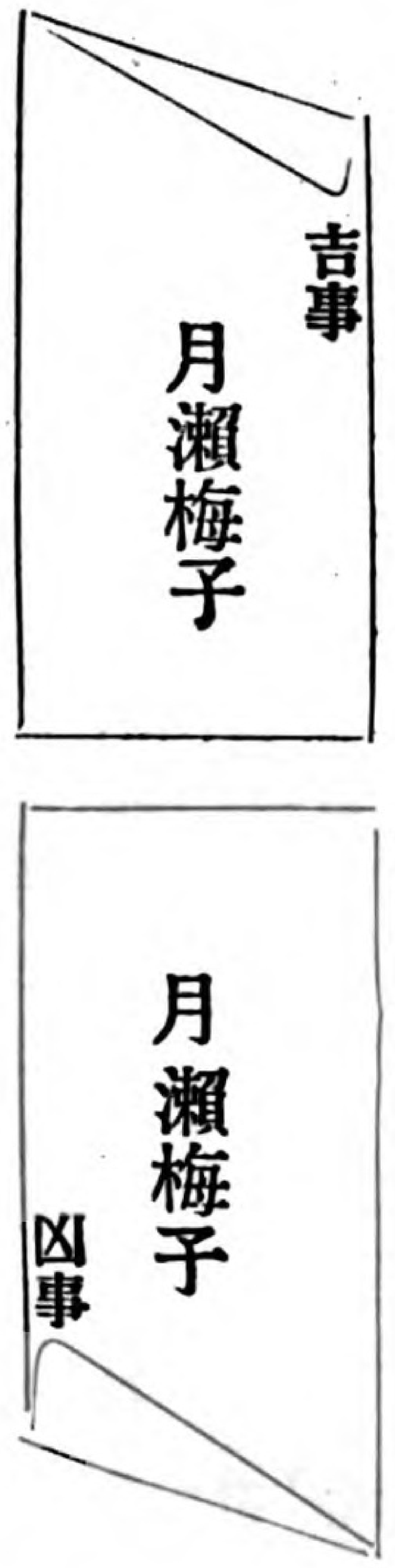
名刺を以て自分の心を先方に傳へる方法

名刺の隅を折ッてわが心を人に傳へる法を西洋では交際社會でつねに用ゐて居ます。日本でも此法を知ッて用ゐる人も有ります。が、普通では有りません。併し西洋でも別に規則や條例でそれを定めたものでも無いため時に其方法に些しづゝの變化も生じ、今日に至ッてはパリシヤン風とか、ヨルク風との二種三種ばかりの種類になりました。これは一定して居ないと却ッて不都合です。そして名刺を以てわが意中をあらかじめ人に通ぜる事に於てどんな便利が有るかと言ふに、中々一概に之を虚禮として斥ける事も出來ぬ利は有ります。

まづ人をおとづれて何の用に尋ねたかといふ事をあらかじめ名刺を差し出して主人に知らせるのと主人に取つて甚だ便利です。主人によつては時として居ても居ないと留守をつかふ、あの場合に於て或は必用の用事で來たものを同じく追ひかへす事も有るものです。併し差し出された名刺を見てあらかじめ其意の有る所を推察し、そんなら逢ふなら逢はうと決心すれば其間よほど無駄なことが省ける譯です。このために今吾々はパリシヤン風とヨルク風及び在來日本慣用風これら三色を折衷して左れ法を定めて見ました。



右の肩れ「用事」は何か要用の事で尋ねて來たとの意味、左の肩れ「訪問」は別に用も無いが無沙汰見舞とか又は話してゑ、又は遊びに來たとの意味、右の裾は何事なりの禮を言ひに來たとの意味、それから左の裾の「告別」と他國へ立つとか何とかの暇乞ひに來たとの意味を示すもので、其折り方と外へ折ッても内へ折ッても差支は有りません。かうして折ッて差出して置けばよしや主人は不在であつたよしろ歸つてから其名刺を見て直に意味の理解が出來ます。猶、これより外にもう二種あります。



即ち圖のとほり左の上から右の肩へかけて折りとほしたのが凡ての慶事の意味、そして其下のは折り方も丁度反對で、意味も反對です。

まづは普通に入用なのは以上の數種類で、之を主客ともよく覺えて居れば飛んだ便利にもあり、また優美でもあるのです。人によつては最初の圖のとほり名刺の角に一々訪問とか禮謝とか記し付けて置くのも有ります。が、それは些不意氣です。覺えるとて譯の無いことです。

今日流行の名刺、其最上等はアイボリイといふ紙に彫刻板で刷つたのです。但しアイボリイは安い所で百枚紙代だけで一圓斗り、それ故割合に多くは出ません。普通に行はれるのはアイボリー擬ひ紙へ刷ッたので、是なら六十錢くらゐで出來ます。鳥の子刷はもう流行の粋ではありません。版は石版よりが矢張り普通、字体もことに行書が一般です。中に隷書は之に亞ぎますがいよ〳〵流行の見込が有ります。中には活版と見せ、其實石版で摺つて、恐ろしく疑つたのを用ゐる人もあります。たゞ〳〵普通のところは前に言つた行書体です。

いらつめ文藝應募者の品評　さとのや投

いらつめの文藝は近頃に至り凄まじいばかりに進歩し、ことに前々号「子の生れた人心」などの時は座に傍觀者をして當代の紫式部赤染衛門の才筆に舌を捲かせました。なれてゝから才筆を研ぎ上げてやがて日本文壇に一方の女王ともある才女はどれ程か、不肖なれど文學にいさゝか志ある小生は嬉しさも殆んど口に言へません。因ッて僭越の毀を顧みずこゝに重立つた各淑女君子たちを品評して見るつもりです。中には失禮な言葉もありましやうが、熱心いよ〳〵御上達と望むばかりの老婆心と何とぞ御見做し遊ばしませ。

三坂きぬ子　斬新なる句に富みて、文の掛け退き中々並のデモ文學者も及ばず、さりながら時に斬新と求め過ぎて却つて奇巧に過る所あり、之を花に譬ふれば牡丹なり、其豊富なる處玉膩香露滴々（文章家。）

藤元なさ子　泉州堺は如何にして斯くまで文才の淑女を出すや、前の三坂きぬ子も堺といへば押しなべて一對の天秀なり、文の掛け退き中々物馴れたり、意匠にも頗る富む、但し新奇想に至つては或は三坂孃と比して如何ならん、花ならば石楠花、品のよきところが重量なり（文章家。）

横山ひろ子　力身のある骨法あり而してよく規矩以外に馳らず、淑女の本体正に備はる、惜むらくは艶色やゝ乏し、花ならば梨花、白皚々として香氣身に迫る所その長なり（歌人。）

永島よし子　新意匠に富みたれども折々意匠に比して修辭の負ける所見ゆ、修辭は進歩すべし、意匠は天賦なりば吾は修辭の時に不佳なるを咎めず、その進歩と知ればなり、花ならば五倍子、飾り無くて風流の嗜好に適す（歌人）

橘さち子　其作の可愛らしさを此孃の占有とす、優美恍惚を寫すに適す、それ故に偉大と描くに適せず、さりながら天美爛熳無邪氣なる作者をもしいらつめ中に求めなば吾はこの人のため第一指を折らんとす、花ならば白百合、清艶楚々として憐れむべし（歌、文）

撫箏女史　いらつめ隊の一派れ大將、散文韻文の両刀に熟して温雅なるが長所なり、花ならば紅薔薇、美にして麗なり（歌、文）

石川のぶ子　今はいかゞされしや御作を見ず、雲隱れとは情無し、才氣滿々研かば夜光の璧となるらん、花ならば支那水仙、修袴を穿つて春風に笑む（歌。）

香園女史　如何にも愛らし、宛然として處女の口吻、それに似合しからぬ文勢なり、折々不思議なる佳句を出していらつめ記者に批点を費さしむ、望みある才筆といふべし、花ならバ紅梅、半開にして微紅を洩らすところ情致脉々として人に迫る（文）

伊東曉子　文氣極めて鋭し、例を取らバ清少納言か、雅俗兩文間つながら自由にこなして——但し御作により て察せる處猶御年の若き所は往々見ゆ、艶あり、色あり、百媚千嬌、花ならバ白菊、亭々として霜に立つ（文）

（未完）

一　二号前の女學雜誌に寄書して、言文一致体ハ昔から有ると述べ、何か美妙が其創造者の名を獨占したやうに言ハれた人が有りました。兎に角文學に御志の厚い方と思ひ、一寸こゝで御答へしましやう。如何にも仰られる迄も無く、言文一致も昔にも有りました。但し今日吾々が言ふやうな理窟で何をも言文一致に書かうとした例が果してむかし有ましたか？よし一時ハ有つたにしろ、さて一時ハ絶えました。無論圓朝子の筆記ハ言文一致です。併しあれハ文として述べた言文一致で無く、むしろ言として述べた言文一致でしやう。そもそも今日の言文一致、之を實地に用ゐ始めたのは吾々の一類です。ヱッとハ蒸氣を發明しました。但し其實ヱッとのはるか昔は同じく之に注目した人ハ有りました。ならバ蒸氣の發明の功ハヱッとに歸しませんか？　三歳の童兒でも有無の答ハ付くでしやう。折角の御言葉ながら、右の事情ゆゑ、右寄書家の御批評ハ只有り難く拝見したゞけにします、

樹翠陰史に　日本文華の岸上質軒氏

むづかしや

賴まれもせぬが、餘り質軒氏の血迷のをかしさに拙者が彌次馬に出てまゐつた。質軒氏ハ樹翠陰史に前々号のいらつめ誌上で撃たれる、扨どう答へられたと思へバ、何のまアヤレ〳〵論法といふ事を知ろし召したまはぬ。樹翠陰史ハ繰言を言ふ、泣言を言ふと質軒氏御自身が、笑止千万！繰言泣言イヤハヤ御賑かな事でムッて——聞きたまへ温雅なる淑女諸孃、それが正當の答でムらうがいの？議論を上下するにハ其理について喃々するが法則なり、他の文の繰言泣言を言ふと卑怯極まる話し、つまらぬ返答に究して穴とさがしたとしか見えん。いや質軒さまはさうでもムるまいが、世の中ハまづ其樣なものでムる。つまりと肝心の理窟に於てハ質軒氏一として陰史の説を破り遂げず、かるが故に六かしやこゝに判決と下し、新製の法官の服を着けながら、「質軒氏負けたりと言ふ事然り。

新作十二番之内

嫁入り仕度に教師三昧と讀むで美妙主に呈す

駿台ニテ　卒　宮田

女學校ゝ醜聞漸て止むで亦嬪くらんとす心ある者眉をひそめ心なき者更に囂々庚申塚之三猿影を潜くし社會之亂是ゟ甚しきはなし新聞紙も雜誌も男も女も萬口一撃其非をなゝよ風わり習々大樹と抜き巨屋と倒よ籬下之雜卉華々繁茂す嗚呼口わる者は演しわる者と鵜く手ゟな者と筆し眼はる者と覩る未だカッテ撲生さゑと脩未だ全く除滅さゑ嘆聲交々起ると離其れ之と如何余思ふに女學生れ心脾と快し九腸と絶ち彼自身をしく顧ゝく忸怩たらしむる者く微を穿ち性とゑがく小説に如くなし！信ぜ此頃賢作十二番に貴著嫁入仕度に教師三昧なり熱讀再三余歎ず貴君之小説家としての慧眼なるに感伏せざると得ぞ豈〃や志保子其人の如き女學生の一讀愧化せさるを得んや「志保子ハ何者ぞ學問乗抜身道徳の主任之教育家にありながらカヘッテ不讀を奬勵を府下若し斯の如き女學校ありとすれバ兒女を托する父母の心情愚として憐なり學校教師之人物ハ箕でふるッゝものゝ一句道徳書幾冊之價値あるゝ知らず貴君の此著あるゝ此篇し大着眼たるべし」本著蓋し瑕瑾なしと云ふ能はざるべし大凡一語千金之文字第一親之慈悲より第六大臣落に至る迄一言なし別けて第九演舌加盟之章尾「あゝやう〳〵取り口ふわりついた！親の前が胡麻化せるの」一句能く現今生意氣な女學生之一長針一語万金も日缺辯にあらざるべし新作十二番一二の不許此に於て活も予も未來小說家を以て自任し來春花々しく討て出で先軍詰斷にまゟぬと云ふは自惚なから貴著韻文論に就てハ愚見も意見の伺度武器を銘きて相待申候據今斯くの如ぎ好著述に接し默々觀過し能はず美きと云よ唯是れ醜ならさるの說あれにならずと雖學生寸暇なけれバ事々しき批評自慢夫よそ教師三昧などの詳細ハ御面會の節申上げ此處よは聊か貴下か文明小說家たるを發見！無痒一言を以て感謝の意を表も希くは貴社新聞之餘白を惜まず殘今文學家としての幾多の小說家に對して余が微衷を入られん事を愛かなし、

右の文ハ改進新聞社に寄せられた物ながら都合により當社で貰ひ受けました…………いらつめの記者

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●新刊雜誌

○數學通信第二号　十月廿六日發兌、發行所神田今川小路一丁目高等數學會院、定價一部郵稅共四錢、數學に關した雜誌ですが、主として娯樂と利益を料ッて作ッた物と見えました

○音樂雜誌第二号迄發兌になりました。名の通り音樂專門の雜誌で今日他に類の無い處、吾々ハ大に之に屬望します、一冊六錢、麹町區有樂町一丁目音樂雜誌社發

○小說叢書　維新前の小說と取集めた雜誌、但しあまり世に普通である膝栗毛などを出されたのハどうですか、成るべくハ之より眉一寸實雖いものと出されたく思ひます。一冊九錢發行所北豐島郡日暮里村聚芳社。

○新東洋「天下の青年に自由主義と注入し志士たらしめんがために新東洋を發兌す」その言葉が此雜誌の表紙に書いてある文です。中よハ十八史略論語などの講義が有ります、一冊郵稅共八錢五厘、千葉縣千葉長洲文學社發兌。

通信問答

秋野鹿鳴人――㈠吉川女史の論と一昨年頃の讀賣に寄書でしたと思ひます㈡言と文と一致すると云ふのは、裏から言へばどうしても言文の相違は許さぬのです。御注意といたゞきたいのは社會普通語と俗語との二種です。俗語は取るに足らぬもの。普通語は一定の文脈を以て共通が充分出來る語を言ふので。言文一致派の主意も文も言も此点まで引き付けやうと言ふ点にあるのです㈢言ハ兎角文と同軌道を順行するれへ好まも多く背き〳〵ます。それと手綱を執るのが實へ文章家れ眞正の任なのです。不規律に走らせぬやう、さうして進歩を妨げぬやうするのが文章家の義務で、さうなれば逆行の掛念は有りません㈣言文一致派では普通の德の比較して多い處から東京語と撰んだのです。大字書大文法書が出れバ各國不通の弊ハ尙更去ります㈤美妙齋氏ハ小說韻文双方に盡力されるとの事です㈥懸賞文の〆切ハ差出郵便局の日付を証とします。

よしき――㈠婦人演說會の辨姫諸姉の住所本名ハ知りません。㈡吾々ハ婦人の演說に左袒も出來ません。

SN――エミルヅバリの處方中れテルコールハアルコールの誤植でした。

鈴のや――㈠御示しれ石鹼ハたしうに佛國製の化粧石鹼です㈡オリーブ油ハ橄欖樹の油です㈢世の中にハ必ずしも女が男に懸想そるのミでハ無く、男も女に懸想します㈣わるく逆上して足の冷るのハサルサ根を内服しても宜しいです。

たより――㈠和文學獨習の法と丁度くはしくよく本月の大日本教育會雜誌に出て居ました。[illegible]には字音かなづかひ一本居（爲書）汁と漢呉音圖、かなづかひ江と古言梯（ゟ集氏かなづかひ教科書も參考によし）てにをはハ詞の玉の緒、詞の玉の緒く、りけ、品わけよは詞のやちまた、詞のかよひぢ、活語指南、活語雜話、辭格考以上

つらき――㈠美妙齋主人著作小說はどた〳〵有りますが、其中で重立つたのハ夏木立初編、花ぐるま（都の花）、この子（同）、ひいるやむゥわ（同）長入菖蒲草（同）いちご姬（同）胡蝶（國民の友）ぬれ衣（書肉）、教師三昧（春陽堂）、人よし男（改進新誌）などで以上ハ皆出版しました。今半分出て居るのは葛の裏葉（改進新聞附錄）、過る十月二日ゟ都の花よ「腕だめし」來月金港堂から發兌する「大恥辱」、但し大恥辱ハ續冊も續いて出版する書です㈡この御問ひは号數と一寸忘れましたから次号まで御待ち下さい。

少蘭――小說文章添削規則ハいらつめ第廿五号にあります

水野秀――當社添削規則よ八百字迄とあるのハ二曲でも三曲でも適計したことです。

JN――「まさなくも」と「正無く」の意、即ち卑劣の義㈡小枝ハサエダと讀みむかしの名箇です。

飯田町とき子外三人――㈠ハンドコロンハ無色透明です、つけた後の注意ハ以前のいらつめよ有ります、三号よ獨ッて居ますから郵券十錢御送りなされバ差上げます、一回で奏効するのもせぬのも人によります㈡之と矢張澤山用ゐるが宜しいのです衣類よは染ミません㈢夜寐る前よつけ朝起きて水でゞいも濕でゞいも洗ひ落すのです㈣之と用ゐて食物なゞ別よさしたる注意ハ入りません㈤ポマドンヌールと併用それバハンドコロンの奏効も速です㈥之と用ゐて居て外出しても何でもかまひません。寒風ハ全体肌を見るくそるものでそうら之よ觸ハる時にハ成るべくポマドンヌールかハンドコロンを塗るが宜しいです。

苦勞性――㈠髮をよくする法ハ以前のいらつめよ出て居ました、御入用ならバ郵券三錢御送りなさい㈡齒みがきよハ京ばし出雲堂資生堂の齒みがき石鹼が宜しいです㈢前の一れ法を用れバ眉も濃くなります㈣髮のフケを去る法も前のいらつめよありましさ、御入用なら郵券八錢五厘御つかへしなさい㈤眉の恰好ハ迚も直りません㈥頭痛ハ然るべき醫者の診察を御受けなさい。

笹川はる子――蛇は胡椒を嫌ひます。それ故胡椒の粉を時〳〵畫けバその氣ノ無くならぬ間は蛇が來ぬとの事です㈡千齋の習字書と價を忘れました。問合せて次号へ出しましやう

良妻を求む

こゝに歐米の法に傚ひいらつめ紙上を借りて良妻を求む左の各項に對して不同意ならせられず應婚の芳志ある令孃は幸に其意と通せられよ

第一 容貌絶美といふ程ならざるとも普通ならば嫌はず

第二 家事經濟及び交際に巧なるを最一の主眼とす

第三 年齢十八年以上二十三年以下

右を應婚者の資格とす求婚者の嫌忌する處は所謂生意氣なるよなり生意氣ならずして以上の資格に適すと思したまふ方は本月十五日迄に大坂市大坂町大坂毎日新聞社吉形吉松に宛て自己の寫影を添へ申込まれたし。求婚者は大坂に住し民間の業を執り藝術を以て中等以上の生活と爲す此廣告は誓って奇を弄して世を欺くものに非ず求婚者は實に誠意を以て之を世に問ふものなり

新東洋第貳號廣告

社說……英雄を論じて青年を誡しむ……東海漁人

講義……十八史略講義……直堂居士

論語講義……總生梅仙

文章軌範講義……二木幹

莊子南華眞經講義……寥雨亭主人

徒然艸講義……石川鴻齋

文苑……鉄蕉

詩……十三首

史談……クロンウエルを論す……桂灣居士

寄書……興仰天歎人書……長谷川甚太郎

灣白童子の問に答ふ……好耶生

雜報……總野學會彼を何物ぞ●慨然たる青年は何人ぞや●嗚呼碩儒スタイン氏逝矣●暗風黒雨●血涙一滴又一滴●女子の法學博士出づ●輔車學舍の近況

本紙定價一冊八錢(郵說五厘)

發行所 千葉縣千葉町長洲 文學社

拜啓皆樣御覽じろ是は此度日本に創めて生れ升たる未曾有の音樂雜子にて第壹號の發兌より意外なる御評判を預りたるは弊社の光榮のみならず當今音樂の盛なる事を知られ升巻中には內外音樂の論說、名家の作歌、新曲の樂譜、音樂大家の歷傳、音樂の歷史、唱歌の教授法より唱歌集歌詞の解釋、地方の音樂、問答、小說、雅樂、清樂、能樂、神樂、演劇の事項、坊間の流行節、俚謠、盆踊、等轉、か珍とり音樂の音の字に緣あるものは猫の鳴聲に至る迄も洩さず載掲しはれば旦那方にも御婦人方にも御孃樣にも生徒衆にも會社商店の若衆方にも花柳社會の姉さん方にも何方樣にも御覽なされて至極面白く且つ御爲めになる雜子で有升毎月廿五日の發兌にて定價は僅に一冊六錢半年分にて三十六錢又御便宜に依り郵劵代用にても宜しふ御座い又何なりとも音樂の事に就て御報道に預りたる件を雜誌に掲くる時は壹部を其御本人へ呈上致し升又先に端書にて御注文下され次號發送前迄御回金あれば全國中郵稅を請けずに配達致し升故ドンドン御注文と御吹聽を願ひ升

東京市麹町區有樂町壹丁五番地 音樂雜誌社

俳諧一日集

連月一回發行 第十九編既發

●當集は即本會の機關にして其營利の目的にあ非されは費用の低廉なる取扱の懇切なる全天下に其比無し●當集は未一回も休刊せる事なし●當集は活潑なれ共過激に失せず看實あれ共因循に陷らず●當集知らさる者は眞正の俳人に非ず●當集を讀まさる者は斯道の熱心家に非ず●當集を見て驚かさる者は無心經の人也●當集を見て感ぜさる者は暗愚の小人也●當集を侮る者は未俳諧の妙と知らさる者也●當集を誹る者は巳の及はさるを披露する輩也●當集を嫌ふ者は斯道の進歩を妨害する徒也●當集を監督する者は會長泉々居穿井也●當集を離れさるは俳諧の大道也●當集の放てるは正風の光輝也●當集に本會規律、會報、論說、俳談、講義、參考、新聲、追加、雜録、本評兼題、句合、詠史、互撰、互評、雜題、餘興、廣告の諸欄あり●當集の見本は會費四錢にて呈す

東京日本橋區蠣売町二丁目四番地 松風會本部

毎週日曜日發行

數學通信

第一號十月十九日發
第二號十月廿六日發
(一冊三錢五厘郵税五厘)

東京神田區今川小路一丁目一番地 高等數學書院

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

遞信省認可

學術技藝 **進步之媒** 十一月二十日第一號發兌 毎月二回五日二十日發行

定價 一部前金七錢●五部前金三十三錢●十部前金六十五錢●地方は郵税を要せず●爲替は芝口支局宛●郵劵代用一割增

●發刊の主旨……谷島作次郎

●論說……○文明とは何ぞや敢て萬國公法學者に質す○市町村の性質を論じて市町村警察の必用に及ぶ○目的と手段とを混同すること勿れ（政治學上並に經濟學上の二大現象に論及す）……稻垣豐之助

●特別寄書……○行政裁判……東京新報主筆　朝比奈和泉

○當世の文學者……二階堂行文

●文藝……○吊チルソン歌……文學博士　末松青萍

●滑稽講談（社會學一班）●史傳●演說（大家の演說三種）

●批評●雜報　數十件

發行所 東京京橋區弓町十番地 **進步社**

今や諸法典續々發布せられ吾人之を知るの必用を生ぜり然れども註釋書高價にして同胞一般不便と感ぜり依て本社茲に江湖諸君の爲め一大便益を計り非常の勉强を以て本誌五部以上申込者に限り

毎號六十頁に餘るを註釋附錄とし（商法より始む）印刷實價（郵税共三錢）にて續々配附すべし●印刷の都合もなれば望の方は至急申込なき但註釋のみ望の向は一冊に付き八錢づゝ申受くべし

美妙齋主人新著

渡邊省亭密畫

嫁入り支度に **教師三昧** 全壹冊 讀切 定價金卅五錢

新作十二番の中

右出板仕候

東京日本橋區通り四丁目角 **春陽堂**

名刺 石版 印刷

紫式部

阿茶局

昨年末弊社において**名刺石版印刷**と極めて**廉價**に御請合致したところ**大に世の喝采**を博し猶も今年も**御催促**の有るため折角の御厚情に從ふ事に決し**廣く左記の廉價**を以て御注文に應じます故**續々**御注文と願ひます最も弊社印刷の石版名刺はいづれも**流行の新形**です

◎定價

●一度ずり百枚金貳拾貳錢から上等六拾五錢まで。

●同五十枚金拾四錢から上等四拾五錢まで。

●二度ずり百枚は三拾六錢から上等壹圓拾錢まで。

但し百枚以上の分、及び二度ずり百枚以下は印刷しません

○書き入れるは書料一種につき十五錢を加へる事。

○右の價は紙質の眞否によるのでも、印刷に至ッては何れも同じことでも。

○名刺は注文日から遲くも十日間にてこしらへる事。

○注文の方も名刺差送郵税金四錢を申込と同時に御送りなりたい事。

○普通郵便四錢分に對する書留料御送付の上は同じく書留にして差上ぐる事。

○名刺代は何れも前金で、決して加減をせぬ事。

○注文の方は寸法、價格、字体、字の大きさ、其他一切の事を詳細に申送られたい事。

○此名刺印刷も十二部以上のいらつめ豫約家に限一割引の事

明治二十三年十一月

成美社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY